



名古屋大学最初の外国人教師 —ヨングハンス先生とローレツ先生—

加藤 鉦治

名古屋大学最初の外国人教師

—— ヨングハンス先生とローレッツ先生 ——

加藤 鉦治

目 次

| | |
|----------------------------|----|
| はじめに…………… | 2 |
| 一 外国人教師をとおした国際交流…………… | 5 |
| 二 ヨングハンス先生——メリケン医術の伝搬…………… | 13 |
| 三 ローレッツ先生——ドイツ医学の普及…………… | 29 |
| おわりに…………… | 55 |

はじめに

◆外国人教師の増大

国際的な往来の盛んな昨今です。名古屋大学のキャンパスにも、いろいろな国の人びとが行きかっています。学びにやってきた者だけでなく、教べんをとる人も少なくありません。

二〇〇一（平成一三）年七月一日現在、「外国人教員」は一八名を数えています。中華人民共和国の出身者八名、大韓民国三名、連合王国二名、アメリカ合衆国二名、カナダ一名、ロシア連邦一名、ブルガリア共和国一名という内訳です。これに助手を含めると、一〇か国の国籍におよび、全部で四〇名にのぼります。

そのほか、「外国人教員」という部類ではありませんが、文部省が招いて雇用する「外国人教師・講師」や「外国人特別招へい教授」、日米教育委員会の招へいする「フルブライト招へい講師」、さらには、文部省、本学、日本学術振興会、国際協力事業団、国際交流基金、日本国際教育協会、国際連合大学などの招へいによる「外国人研究員」も加えると、相当な数にのぼることでしょう。

| 年月日 | 外国人教員 | | | 計 | 助手 | 合計 |
|----------|-------|--------|-------|--------|--------|---------|
| | 教授 | 助教授 | 講師 | | | |
| 57. 7. 1 | | | | | 1 | 1 |
| 58. 7. 1 | | | | | 2 | 2 |
| 59. 7. 1 | | | | | 2 | 2 |
| 60. 7. 1 | | | | | 2 | 2 |
| 61. 7. 1 | | | | | 4 | 4 |
| 62. 7. 1 | | | | | 5 | 5 |
| 63. 7. 1 | | 1 | | 1 | 4 | 5 |
| 元. 7. 1 | | 1 | | 1 | 3 | 4 |
| 2. 7. 1 | 2 (1) | 1 | | 3 (1) | 6 | 9 (1) |
| 3. 7. 1 | 2 (1) | 1 | | 3 (1) | 15 (2) | 18 (3) |
| 4. 7. 1 | 2 (1) | 1 | 1 | 4 (1) | 20 (2) | 24 (3) |
| 5. 7. 1 | 2 (1) | | 1 | 3 (1) | 27 (2) | 30 (3) |
| 6. 7. 1 | 2 | 1 | 3 | 6 | 29 (2) | 35 (2) |
| 7. 7. 1 | 2 | 1 | 2 | 5 | 37 (5) | 42 (5) |
| 8. 7. 1 | 3 | 1 | 2 | 6 | 36 (3) | 42 (3) |
| 9. 7. 1 | 3 | 5 | 2 | 10 | 31 (4) | 41 (4) |
| 10. 7. 1 | 3 | 5 | 3 (1) | 11 (1) | 24 (5) | 35 (6) |
| 11. 7. 1 | 2 | 8 | 6 (3) | 16 (3) | 19 (4) | 35 (7) |
| 12. 7. 1 | 4 | 9 (1) | 7 (3) | 20 (4) | 21 (7) | 41 (11) |
| 13. 1. 1 | 4 | 10 (1) | 8 (3) | 22 (4) | 23 (7) | 45 (11) |

() は、女性の人数で内数

外国人教員および助手の在籍状況 (名古屋大学人事課作成)

◆外国人教員任用法の施行

日本人でなくても、本学のよ
うな国立大学の教官に就任でき
るようになったのは、それほど
古いことではありません。一九
八二(昭和五七)年九月一日付
で、国公立大学外国人教員任用
特別措置法が施行されてからの
ことであります。これは、外国
人(日本の国籍を有しない者)
を教授・助教授・講師に任用す
ることで、教育・研究の進展を
はかるとともに、「学術の国際
交流の推進に資する」ことをね
らった法律です。

同法の施行をうけて、本学で

は、一九八七（昭和六二）年一〇月一日付で、はじめて「外国人教員」が誕生しました。総合言語センターにアメリカ人教師が助教授として任用されたのでした。このとき、助手には、すでに工学部と医学部に、インド、トルコ、大韓民国の出身者が四名就任しています。

以来、外国人教員および助手の数は、別掲の表のように、増加をみています。国籍も多彩で、シリア、フランス、ドイツ連邦、イラン、スリ・ランカ、イタリア、ヴェトナム、ヨルダン、ネパールその他の国々からもやって来ています。

それでは、かれらが本学で最初の外国人教師であるかというところではなく、実は、もともと早くから、外国籍の教師が任用されています。『名古屋大学五十年史』の通史編と部局史編には、何人もの外国人教師が登場しています。

一 外国人教師をととした国際交流

1 多彩な外国人教師群像

◆ 語学指導の外国人教師

外国人教師というと、何といつても、語学の教師が数多く招かれています。

総合言語センター、その前身の語学センターには、当然のことながら、発足当初から、語学指導を担当する多数の外国人教師が活躍しています。語学センターが発足した一九七一（昭和四六）年四月には、英語部門に二名、ドイツ語部門三名、フランス語部門一名が招かれています。総合言語センターが発足した一九七九（昭和五四）年四月には、英語学科に三名、ドイツ語学科三名、フランス語学科一名、そして中国語学科に一名が、それぞれ在任しています。これらのなかには、学生指導に励むかたわら、研究の成果をまとめて学位を取得した方たちもいたのです。

名古屋大学

百年の歩み

(34)

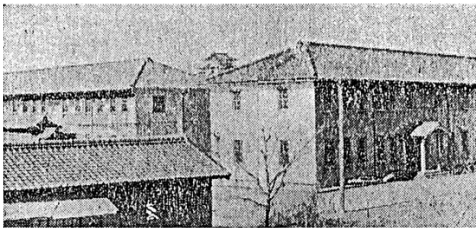
「米人教師招請へ」を

懸念せし、学生らは激
烈に反対した。昭和二十年六月
月五日の学文委員会、最初の
外人教師招請をめぐり学部の
懇談会は、これを採否した教育
会議への学生助
命議への学生助
命議への学生助
命議への学生助

ラーア事件

への手紙、学
部会長の委託に
よる同社、「自注の」が招
請へ、認められた。
新制名大の危機
前年、朝鮮分府、米
國對日招請をめぐり、地租
増徴が、企画閣議、が閣議
を断つた。閣議、閣議の意
を分けた。閣議、閣議の意
を分けた。閣議、閣議の意

米人教師招請がきっかけ



占領後通称名大講堂（現教育学部）

の形も、レソッド、パンが
吹飛んだ。新制名大、四月
吹飛んだ。新制名大、四月
吹飛んだ。新制名大、四月



外人教師招請問題の
先鋒者 佐々木義典

もめにもめた文学部

学生から激しい突上げ

外人教師招請問題の
先鋒者 佐々木義典
佐々木義典は、六月九日、学
部会長の委託に、自
部の招請は、六月九日、学
部の招請は、六月九日、学
部の招請は、六月九日、学

「米人教師招請問題」
の激しい突上げ
佐々木義典は、六月九日、学
部の招請は、六月九日、学
部の招請は、六月九日、学
部の招請は、六月九日、学

「米人教師招請問題」
の激しい突上げ
佐々木義典は、六月九日、学
部の招請は、六月九日、学
部の招請は、六月九日、学
部の招請は、六月九日、学

◆文学部の「外国人教師問題」

語学の教師といえば、文学部も早くから外国人教師を招いています。英文学、仏文学、独文学などを担当する外国人教師が続々着任しています。

文学部の外国人教師というと、いわゆる「外国人教師問題」が思いだされます。戦後の一九五〇（昭和二五）年四月に、各大学にアメリカ人教師の招へいという文部省の提案をうけて、英文学の外国人教師を招くことになり、翌年一月、E・A・ラニア博士と契約が結ばれました。戦後最初の外国人教師です。文部省の提案は、月額三万五〇〇〇円の給与と宿舍補修費八五万円の特支出という恩典つきでした。

けれども、これが学部全体をゆるがす騒動にまで発展したのでした。「講和をめぐる政治的情勢が緊迫し、アメリカの対日政策が国の運命に重大なかかわりをもっていることが・・・過激なほどつよく意識されていた状況」であったなか、「手続の誤り」が問題化しました。着任という形で決着をみるまでに、学部自治への関心が高まり、民主的な原則や方式の確立が模索された出来事でありました。「ラニア事件」と名づけた報道もありました。

◆名古屋高等商業学校の外国人教師

戦前にさかのぼっても、幾人もの外国人教師が活躍しています。



外国人教師の家族と八高生

(『わが友 若き旅人よ、八高八十年祭記念誌』1988、所収)

本学の包括学校の一つである名古屋高等商業学校では、世界にはばたく人材の育成を目ざしていただだけに、開校二年目の一九二一（大正一〇）年に、五名の外国人教師が赴任しています。英語担当のA・E・ニコルズ（英国）とA・P・マッケンジー（英国）、フランス語のA・ブーヅ（ロシア）、ドイツ語・商業地理のA・ヨーン（ドイツ）、それに商業学・英語のG・C・アレン（英国）の諸氏です。

このうち、ニコルズはもつとも長い在任者（一九二一—一九四〇）であつて、かれは「軽妙なるユーモアに富む会話・商英・タイプ等の指導に余念なく、校内外の信望を集め齎しく生徒の慕ふ所となれり」と伝えられています。体操担当のW・R・パークヒル（アメリカ）も、同じころ、招かれています。戦時色が強くなつた一九四二・四三（昭和一七・一八）年には、ドイツ語と支那語を担当する外国人教師が一名ずつ招かれています。『名

古屋高等商業学校一覧 自昭和十八年
至昭和十九年』によると、同校には右の諸氏を含めてのべ一七名の外国人教師が雇われていました。

◆第八高等学校の外国人教師

これも本学の包括学校である第八高等学校の場合は、体操科にW・R・パークヒルが招かれ運動競技師範を委嘱されてきました。右のパークヒルと同一人と思われず。一九二二（大正一一）年から二年間在籍し、「各種の近代スポーツの導入」と「アメリカ直輸入のスポーツ指導」で知られています。同じアメリカ人教師ジョンソンは、同校にバレーボールが入った当初（大正一二年ころ）、その指導に熱心でした。

第八高等学校の外国人教師といえ、ドイツ人教師A・ハーンが知られています。一九〇九（明治四二）年から一九二〇（大正九）年まで在職し、「日本文学の造詣が深く、夏目漱石の『満韓とところどころ』のドイツ語訳がある」という教師でした。一九三四（昭和九）年に就任したドイツ語教師のR・H・ハミッチは、生徒たちがドイツ語の難解なテキストにあきてくると、気分転換というわけで、「テキストを景気よくとして、音楽の時間にくりかえた」のでした。のどに自信があるとみえて、「自慢のテナーで『ローレライ』をうたいはじめ」と、「生徒たちがそれについて合唱した」ということです。『伊吹おろしの雪消えて―第八高等学

校史』(二九七三)には、さらに九名の外国人教師の名前があげられています。

◆医学の外国人教師

医学関係機関にも、外国人教師がみられます。本学医学部の前身校である愛知県立愛知医科大学には、たとえば、一九二二(大正一一)年一〇月から一九二六(大正一五)年三月まで、医化学担当のL・ミハエリス(ドイツ)のほか、ドイツ語担当のF・K・A・ハーン(ドイツ)の名がみえます。ハーンは、これより前、まず前記のように第八高等学校で教壇にたち、つづいて愛知医科大学の前身である愛知県立医学専門学校でも、一九一〇(明治四三)年八月から一九一五(大正四)年三月まで教えていました。一時帰国していましたが、ふたたび招かれて愛知医科大学の予科でドイツ語を教えたものであります。

もつとさかのぼり、明治の初年にも、前身校である医学講習場と公立医学校、それに付設の病院に、すでに外国人教師が招かれていたのです。まず、一八七三(明治六)年五月にドイツ系アメリカ人のT・H・ヨングハンスが、つづいて一八七六(明治九)年五月になると、オーストリア人のA・フォン・ローレッツがやって来たのです。いずれも西洋医学の実務的な人材養成のために招かれたのでした。かれらこそ本学最初の外国人教師であります。

名古屋大学は、官制上、一九三九(昭和一四)年四月一日に創設された名古屋帝国大学に端

を発していますが、数々の前史をもち、その起源は遠く一八七一（明治四）年八月に開設された名古屋県仮医学校および仮病院にまでさかのぼりますから、本学の歴史がはじまって間もないころから、すでに外国人教師が就任していたこととなります。

2. 明治時代の「お雇い教師」

◆近代化のためのお雇い外国人

ヨングハンス (T. H. Yunghaus) とローレンツ (Albrecht von Roretz) は、明治のはじめに西洋医学を伝えた「お雇い教師」でした。

幕末から明治時代に、わが国は西洋文化を導入するため、先進国から進んだ技術や学問を体現した人材を積極的に招へいしましたが、政府だけでなく、地方も民間もそれに呼応して多数の外国人を招きました。「お雇い外国人」と呼ばれているかれらの正確な数は、容易に確定しがたいのですが、ユネスコ東アジア文化研究センター編『資料御雇外国人』（一九七五）には、一八六八（明治元）年から一八八九（明治二二）年までに活躍した、史実の確かな官・公・私のお雇い外国人二二九名の名鑑が収録されています。かれらは、教育、医学、宗教、美術、音楽、政治、法制、外交、軍事、金融財政、郵便、交通、電気通信、産業、開拓など、実に多

方面で活躍したのでした。このうち、主として学校教師として招へいされた外国人は、狭義に「お雇い教師」と呼ばれています。

◆お雇い教師の任務

お雇い教師には、おもに四つの職務がありました。①教師として授業を担当し西洋の科学技術を教えること、②教師の筆頭に位置して学校の経営に関与すること、③日本の為政者の諮問にこたえて意見を申し立てること、④これらの職務を効果的にすすめるために、その基礎となる調査研究をおこなうこと、でした。本務の余暇を活用した日本研究も、注目されます。

ヨングハンスとローレツも、このような職務を期待された「お雇い医学教師」でした。かれらの活躍は本学だけにかぎらず、日本の各地にいくつかの足跡を残しています。錦絵新聞や絵画にも描かれていますし、小説に登場してもいます。それに、かれらをとおして内外の交流もみられるだけに、どんな人物なのかとても興味深いものがあります。

以下では、かれらの人物像を紹介し、本学の歴史が始まったところに、かれらをとおしてみられた国際的な交流の一端を、明らかにしてみたいと思います。

二 ヨングハンス先生——メリケン医術の伝搬

1 築地居留地のドイツ系アメリカ人教師

◆『胡蝶の夢』のドイツ語教師

ヨングハンスが本学に赴任したのは、一八七三（明治六）年五月のことですが、それまでにかれは東京築地の居留地や伊万里県で活躍しています。それも、医師としての活動だけでなく、ドイツ語も教えていました。

司馬遼太郎の大河小説『胡蝶の夢』（一九七九）には、そのころのヨングハンスが登場しています。佐渡から出てきた伊之助が、ペリー来航前の嵐のような時代のなかを、西洋語の才と西洋医学の技量を武器にして、自分の運命を切りひらいていくという物語ですが、そのなかに一八七〇（明治三）年ころ、伊之助がドイツ語の会話と読解を学ぶため、磁石の鉄片が吸いよせられてゆくように、

「ひまをみつけては東京の築地の居留地に住むドイツ系米人の医師のヨングハンという者

の家に通った」

という、くだりがあります。当時の『人名要覧・商館名簿 (Japan Herald Directory and Hong List, 1872)』などによると、この医師こそT・H・ヨングハンスと考えられます。東京・小川町にあったドイツ語塾・竜門義塾の、山縣信というドイツ学教師も、この「築地居ヨングハーン氏に随学」していたという、確かな記録があります。

◆大学東校の医学教師候補

大学東校（東京大学医学部の前身）の医学教師の候補にあがったのも、このころのことでした。政府は一八六九（明治二）年からドイツ医学を採用する方針を決め、翌年二月に、ドイツ人医学教師のL・B・C・ミュルレルならびにT・E・ホフマンと雇用契約を結んだものの、折からの普仏戦争で軍医が不足とあって、かれらはなかなかやってきませんでした。急場しのぎで臨時に雇ったオランダ人教師A・F・ボードインも帰国してしまい、ひどく焦っていたころ、その名が聞こえていたヨングハンスを、しばらく採用しようとしたものです。このときの仲介者が、先の小説『胡蝶の夢』の伊之助、すなわち司馬凌海（一八三九—一八七九）でありました。

ただし、この話は残念ながら実現をみませんでした。その際のおもしろいきさつが、石黒

此御書様管字
ヨングハンス

| | | | | | | | | | | | | | | |
|--------------------------------------|-----------------------|------------|--------------|------------------------|-------------------|----------|---------------|---------|--|---------------------|--|-------------------------------------|-------------------------------------|---------------------|
| 一 同廿三日朝御通シナシ御食檢前日ニ比スレハ僅ニ可ナリ夜中大ニ凡氣ヲ泄ス | 一 同廿四日朝御大便ナシ御食餅ナシ宜ニ築地 | 馬量海御附方左ノ如シ | 芦薈越幾私 番米蠶越幾斯 | 右ニ味各四分ノ一ヲ一九トス日ニ三九御食後ニ用 | 御舍漱棄 明菴 没藥丁幾ヒン子丁幾 | 朝夕糞粉ノ御洗腸 | 鵜二十支壯丹錠一 晝三字此 | 正四位様御着京 | 一 同十七日十二字御大便 <small>甚布狀</small> 一字御粥二十 | 七支夜六字半御粥十支御雜炊十一支壯筋汁 | 一 梳膏ヨリ微御發熱御手足或時温或時冷御精神恍惚トシ明ララス御脈微弱僅ニ指下ニ應スルノミ | 晝三字比普醫沃武 <small>華</small> 比司馬量海拜診ニ差 | エリキシルヲ力カリサテカイ以アイ <small>名</small> 比 | 及トリキヒシト譯系黃幾那兼鉄番米蠶愈約 |
|--------------------------------------|-----------------------|------------|--------------|------------------------|-------------------|----------|---------------|---------|--|---------------------|--|-------------------------------------|-------------------------------------|---------------------|

ヨングハンスによる鍋島直正公診察記録
（『診察御日記』大阪市史編纂所中野操文庫蔵）

忠憲『懐旧九十年』（一九八三）などに記されています。

◆鍋島直正公の診察

旧佐賀藩主・鍋島直正（閑臈）の診察にあたったのも、この築地居留時代のことでした。東京にいた直正公は、しばしば胃腸疾患に苦しみ、嘔吐や下痢に悩んでいました。大典医の伊東玄伯やお雇い教師のボードインにつづいて、ヨングハンスが往診することになりました。直正公の主治医・竹内玄庵や伊東大典医が、築地の名医として知られていたヨングハンスを推薦したのでした。ヨングハンスの往診は、一八七〇（明治三）年一二月二四日にはじまり、死去する前日の一八

七一（明治四）年一月一七日まで、八回にのぼっています。その都度、通訳として司馬凌海が同行したようです。

開国以来、多数の外国人が来日しましたが、かれらは各国公使館員であるか、政府あるいは各地の官庁、学校、病院、会社などに雇われていないかぎり、居留地外での居住や営業は認められていませんでした。ヨングハンスは、まだどこからもお雇いの口がかからないのですから、築地居留地内でドイツ語および医学の知識と技量をもとに活動していたのでした。

2 医学講習場のお雇い医学教師

◆伊万里県立好生館病院のお雇い教師

明治のはじめ、洋学を身につけた実学人材を養成するため、いつせいに各種の専門教育機関が創設されはじめました。官立だけでなく、公立や私立の専門学校も誕生しましたが、当初、その編制や教授の仕事は外国人教師に頼るしかありませんでした。

医学の教育においても、各地で擬洋風建築の学校や病院が建てられ、外国人教師が競って招かれました。愛知県でも、一八七三（明治六）年三月、県の権大属である種瀬千里、病院幹事代表の永井松右衛門らが、外国人教師や訳官を求めて東京や横浜などへ出張し、「アメリカ公

館の幹旋」で雇い入れたのがヨングハンスでした。当時、四一歳か四二歳で、横浜の居留地に住んでいました。永井松右衛門とは小説家・永井荷風（一八七九—一九五九）の叔父にあたります。

横浜居留地にいたといっても、ヨングハンスにとって愛知県雇いがはじめてのお雇い教師ではありませんでした。直正公とのつながりが機縁となったのか、すでに一八七二（明治五）年三月一日から一年間の契約で、伊万里県（今の佐賀県）の県立好生館病院に招かれていたのですが、満期となり横浜に引きあげてきていたのです。

◆ヨングハンスの雇用契約

ヨングハンスが愛知県と結んだ雇用契約は、一八七三（明治六）年五月一日からむこう三年間、給料は一か月四〇〇ドル、これを毎月二〇日の横浜洋銀相場で月末に支払うというものでした。洋銀（メキシコ・ドル）で契約したのは、明治初期には、まだ貨幣の品位が一定せず、国内通貨は正貨に対して信用がなかったためです。これに、横浜・名古屋間の往復の旅費としてそれぞれ四八円を支給し、加えて住宅一棟を無料貸与する、というから相当の厚遇ぶりです。年一五日間の暑中休暇も与えられましたが、在職中に商売の筋に関係することは厳禁、という条件がついていました。



ヨングハンスの契約状（『写真集 名古屋大学の歴史 1871～1991』所収）

◆愛知県仮病院の開設

ヨングハンスとの契約に成功するころ、名古屋門前町の西本願寺別院内に、待望の病院が開設されました。ヨングハンス以下、副教師の足立盛至や訳官、当直医、薬局医、病室係、器械係、病院幹事など、総勢三四名の教職員をもつて、陣容が整えられました。

ヨングハンスが着任すると、メリケン（米利堅）医術の到来だというわけで、病院は繁盛しました。

「病院雇教師米国人ドクトルヨングハンス氏診察之儀創業以来日々入院患者相増随テ時限ニ後レ外来患者ニ於テハ数度登院スルト雖モ診察ヲ不受空シク退院ノ者不少哉ニ相聞候」（『愛知県布達類聚』明治九年五月）

という盛況ぶりでした。そこで、ヨングハンスの診療時間が指定されることになります。偶数の日には、朝九時から正午まで外来患者を診察する。残る時間を入院患者にあて、これ以外は副教師の足立盛至が担当する。奇数の日は、入院患者を先にし、

残り時間に外来患者を診察することにしたのでした。

「氏ハ有名ノ大家学術精妙言ヲ俟タズ凡病内外ヲ論セス速ニ就テ治ヲ請フ可シ慣習ノ久キ世人概子空理臆断ノ漢方ヲ信シ却テ精確実側ノ洋方ヲ疑フ愚モ亦甚シ人命至重生ヲ好シ死ヲ悪ム動物皆然リ人最モ甚トス誰カ夭折ヲ欲スル者アランヤ偕俱ニ長寿ナラン」ことヲ欲ス宜シク良医ニ附クベシ」

このような洋医ヨングハンスを喧伝する記事が、地元紙の『愛知新聞』（明治六年一〇月）に掲載されました。『愛知週報』（明治六年一〇月一九日）にも類似の文がみえます。

◆日本最初の皮膚移植手術

ヨングハンスは、なかなか非凡な医師でした。

右脚にやけどを負った患者に植皮術を施したのは、一八七四（明治七）年九月のことでした。患者は愛知郡中根村（今の名古屋市瑞穂区中根）で農業を営む伴野新左衛門。弟の新蔵がさし出した左ひじの皮膚を移植したのです。当時の『愛知県公立病院及医学校第一報告』には、

「蓋シ我邦此術ヲ行フ最モ新奇トスル所ニシテ衆医員大ニ其術ノ巧妙ナルヲ歎賞セリ」

とあります。『名古屋大学医学部百年史』（一九七七）では、「恐らく我が国始めてと思われる斬新な手術」だと位置づけられています。



ヨングハンスの植皮手術（東京大学法学部明治新聞雑誌文庫蔵）

西洋医学による治療は、当時、考えおよばぬところでした。せいせい膏薬を塗るぐらいで、やけどの処置として植皮という外科手術はまだ考えられなかつたはずです。そうした医術の先進性のほかに、弟が兄のために自分の皮膚の提供を申しでるといふ話題性をもっていましただけに、この植皮手術は世間の耳目を集めました。『官許読売新聞』四一号（明治八年一月二六日）で報じられましたし、錦絵としても描かれました。正確にいえば、『大阪錦画新聞』（二三号）という錦絵新聞です。

長谷川貞信（一八四八—一九四〇）という大阪の浮世絵師によって絵画化

されたもので、右ひじをついて、患者の左脚を押さえつけながら手術を施している様が描かれています。患者は椅子に腰をかけ、左脚を前に投げだして踏んばっている。その脚はむくみ鮮血がしたたり落ちています。顔をそむけ、口は真一文字。痛みをこらえているのか、ひざをつかんでいる右手には力がこもっています。術者ヨングハンスもまた、目はつり上がり、メスを口にくわえて力をふり絞っている。そのメスには血がついているから、むくんだ部位を切除しおわって、両手であたらしい皮膚をまさに移植しようとしているところなのでしょう。荒い息づかいが聞こえてきそうな、とても力強い図柄です。術者は洋髪・洋服、患者は髪をつかねてへこ帯・和服姿という対比が、まことに印象的です。

もつとも、この植皮手術の予後は「決して樂觀はできない」ようでした。拒絶反応や感染症併発の危険性が大きくて、どうみても皮膚は「生着しなかつた筈である」といわれています。

◆コレラ予防の啓蒙活動

難病・奇病が発生すれば、すぐにヨングハンスの腕前が頼りにされました。一八七三（明治六）年に、「ビリビリ病」といつて、発病すれば全身がしびれ、眼は開いているけれども見えず、一日か一日半のうちに一声も出さずに死ぬという、実におそるべき奇病が名古屋一円に伝染したときも、やはりそうでした。その病源がなかなか明らかにされない現状をなげき、さら

藤下病院後師ヨシハンス此列判病の誤謬○印度地方
 ヲテ神妙病ヲ發源シ流シ又那邦門ヲ播キ語説ニ
 捕管ス及ベリ余其撰譯病源ノ定誤ヲ駁シ後際連
 述總解解スルノ弊ヲ責テ一献スルヲ瀆望ス 第一
 條人昔去病スル所ノ汚穢ハ先づ瀆穢ノ悉ク掃
 シ必ズ應テ掃取物ハ凡テ田畠河ノ運捨スヘシ市中ノ
 及ヒ津濱ハ皆々キニシテ而モ一河ニ新水ヲ通流セシ
 メ方ノ流水等ヲ悉ク流下ス其水種ルハ一掃掃除ス
 ベシ 第二條上田ハ居住ヨリ五十ヤルドヲ隔ヘシ
 ヲハ一分ニ塵土ハ通流掃除シラシメ又是レ前ノ上田
 過ギテ風氣ノ進入ヲ欲メザルナリ上田便所ハ兩三日
 ヲ必ズ掃除シ空ニ散ナルニ至レバ即チ掃取石灰或ハ
 灰澆水ヲ以テ汚穢ノ為ノ下セシテ糞ス勿レハ汚
 穢リタル患者ヲ大俵船内ノ便所ニ棄ルニ先ツテ汚
 穢ノ知週報 第三十一號

廣ムハシテ其汚穢ハ木灰及糞臭石灰噴霧器
 多亞松石粉噴霧器等ナリ 第三條市中汚穢ヲ運流スル
 水ハ必ズ飲料ハ料理ニ供スベカラズ飲用法ハ市中地
 下汚穢小河ノ運スル者ナリ市中ノ井ヲ清潔ニシテ
 近傍ノ汚穢アル者ヲハ一除塵器ニ清潔ニシテ井水ノ
 エリ用フベシ水ヲ汲テ茲ニ二十四時或ハ三十六時ヲ
 ギスバ散テ臭氣ヲ食出シ得ズ 第四條糞ノ食物等
 物通流汚穢メ赤水ノ汚穢メ又自ラ湿度ノ熱氣メ噴
 ヒス而モ毎身彼ノ胃腸ヲ毒ニ依テ保潔シ得テ 第五
 條凡テ不消化食品ハ料理ニ供スズ運送スベレ而モ不
 潔ニ斯ノ如シ及管地汚穢源トナル 第六條前
 述シ病源者ノ衣服履物ヲ濯洗スル一時間ノ間
 ナク必ズ濯洗スル 第七條糞土自ラ清潔ノ上保
 善下ノ近傍ニ在テ汚穢ノ為メ糞土ヲ糞糞セシラザ
 ラズ糞土ヲ清潔アルバ必ズ糞土ヲ貯藏セラシムル
 ナラン云々一十八百七十五年八月十三日ヨシハンス
 右譯語讀アルヤ難キ者多ク伏テ高懸テ

ヨングハンスによるコレラ防止の口伝

に他にも波及するのではないかと憂えるなか、
 「予此病ニテ死セバ速ニ病院へ申出デヨングハンス氏ニ
 解剖ヲ乞ヒ此病源ヲ探リ今后ノ予防ヲ考覈シ然シテ世間
 ニ公布セント托スベシ」
 という新聞記事（『愛知週報』明治六年九月七日）があらわれ
 ています。

コレラ予防については、具体的な予防法や留意点を説いて
 啓蒙につとめました。『愛知週報』（明治六年八月二四日）に
 は、汚物の処理、井戸の位置、寢室の開放など七項目にわ
 たつて、ヨングハンスによるかなり詳しい忠告文が載せられ
 ています。

◆診療や解剖の公開

県下の医師に対しては、要望をいれて診療を見学すること
 を許しました。医師の子弟も見学できました。見学者の多い
 日も少ない日もあったので、地区別の見学日が指定されてい

ます。

死体解剖も公開しました。解剖所は、名古屋の下前津町榎小路に設けられていましたが、ヨングハンスは、一八七三（明治六）年一〇月以来、ここで処刑人の死体をしばしば解剖し、これを病院の医員のほか県下の開業医に公開したのでした。一種の臨床講義です。一体の解剖につき一二銭五厘の見学料を支払い、解剖の終るまで数日間有効の通し切符を手にした見学者が、押しかけました。かれらは西洋医術のメスさばきに、驚異の目をみはつたにちがいありません。このようななかから、正式の医学教育機関を設置する要望が高まり、やがて医学講習場が病院に併設されることとなります。これこそ、本学の医学部の前身校です。一八七三（明治六）年一月のことでした。このとき、二〇条からなる医学講習場仮規則が制定され、教育体制の整備がめざされました。

◆医学講習場仮規則の制定

医学講習場仮規則によると、一学年二級ずつの計四年間が修業年限と想定されました。三〇才以下の生徒には英語の原書を教科書とし、文典書・究理書・化学書・解剖書・生理書・薬剤書・内科書・外科書が用意され、それ以上の者は訳書で学ぶことを原則としました。

ヨングハンスの講義は、毎月二、四、七、九の日の午前九時より一〇時までとなっています。

○醫學講習假規則 明治七年十一月制定

第一條
 一 入學志願ノ者人其年齡ニ拘ラス差許候条左ノ雜形之通取認受人差添當日ハ時午前牙十時ニテニ病院玄関ニ差出シ可受指揮事
 但受人ハ親戚或ハ寄留所ノ戶主クル可キ事

雜形ノ之
 牙二條
 一 痘病未ク發濟セサル者ハ入學差許ス可カラ
 ノ者ハ譯者ニ頼ハシム可キ事
 但三十歳以上ノ者ト虽モ既ニ原書學ヒタル者ハ勿論有恙ノ徒ハ此限ニ非ス

牙十條
 一 教師米國スドクトルヨシカハンス氏毎月ニ七四九ノ日午前牙九時ヨリ十時ニテ講義イタクシ候事

牙十一條
 一 教師講義ノ節筆者ニ於テ其講説ヲ明詳記録シ之ヲ生徒ニ回覽セシメ候事

牙十二條
 一 醫師ハ勿論子弟ノ徒ニ至ルニテ教師ノ講義聽聞致シ度輩ハ左ノ雜形ノ通取認當日午前

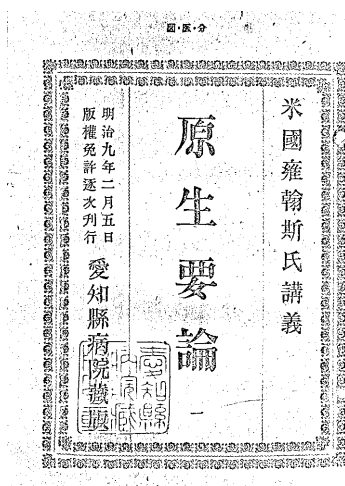
医学講習場假規則（『愛知県史料』1876年11月、所収）

「醫師ハ勿論子弟ノ徒」つまり学外者に対しても、公開されてきました。学習の便宜を考えて、「其講説ヲ明詳記録シ之ヲ生徒ニ回覽セシメ」ることになっていました。講義録が用意されたのです。けれども、「一時間の講義は通訳を介してのことでもあり、ごく一部の生徒がごく一部を断片的に理解するだけで」あつたであらうと思われれます。

◆講義録『原生要論』の刊行

ヨングハンスの講義録は、今日、一点のみ伝えられています。生徒むけではなくて、病院に在職する医員と県下の医師のために特別に開いた、生理学の講義録です。

「夫レ原生学ハ有機体^{動物}ノ常態變化ヲ論ズル所ノ者ナリ」と説きおこし、順に、血液論、



ヨングハンス著『原生要論』（名古屋大学附属図書館医学部分館蔵）

血液循環論、分泌機総論、分泌機各論へとすすみました。内容はヨーロッパの生理学説のダイジェスト版であります。この講義は訳官の鈴木宗泰が口訳し、これを病院医官の石井榮三と蜂須賀謙吉がそれぞれ筆録・校訂して、二巻本にまとめられました。

『米國雍翰斯氏講義 原生要論』

がそれです。雍翰スとはヨングハンスの和名です。一八七六（明治九）年に刊行され、県下の開業医に頒布されましたが、二一錢五厘で市販されもしました。体内の臓器の位置や形状などの図式も挿入されていますが、これは講義のさいヨングハンスが図示したものでした。

同書は、本学の歴史上おそらく最初の学術出版物であり、しかも、成績優秀者への褒賞品として贈られたという点でも、注目されます。期末ごと

におこなわれた定期試験（口述試験）の成績上位者に「金銀書籍器械等」を贈るといふ褒賞の慣行は、一八七八（明治一一）年から始まっていますが、同書は西洋医学の翻訳書という貴重な図書であるだけに、賞品として贈られたことでしょう。

◆ 医学校設置のための世論の醸成

ヨングハンスがみせた西洋医療は清新であっただけに、人びとを魅了し見学希望者が日増しに多くなりました。これが医学講習場の設置につながったのであろうけれども、かならずしもすんなりいったわけではありませんでした。これには、興味ある裏面史があります。

実は、世評はかならずしも芳しくはありませんでした。ヨングハンスのことばがよく通じないことから、患者の信頼はえられにくかったはずで、それに、漢方医や鍼灸師らの保守派勢力からの抵抗もあいかわらず根強かったようである。

「県下人情旧習ヲ喜ヒ漢医鍼灸巫祝僧尼等ヲ信シ却テ精確実側ノ医療ヲ疑フ是ニ於テ病院盛大ノ形アレトモ誹謗亦随テ起リ噉々其虚ヲ吠ル者アル」といった状況でした。

そこで、県当局は一策を講じました。管内の医師のなかから病院附属医を任命し、かれらと病院在職の医員とにすすめて医学校設置の建議書を出させ、これによって世論の醸成を画策し

たのです。右の引用文は、こうして任命された病院附属医のひとり中島三伯（一八二四―一八七四）の手になる、医学学校設立建議書草稿のなかの一節であります。

先に、洋医ヨングハンスにすみやかに診断をおおぐことの賢明さを喧伝した、新聞記事を紹介しましたが、実は、これも、中島三伯が西洋医学の啓蒙と病院への支援とを期して、『愛知新聞』や『愛知週報』を活用して訴えたものだったのです。このような画策が功を奏して、ようやく医学校が誕生し盛大になります。

ヨングハンスの契約は一八七六（明治九）年四月末日まででした。しかし、その前年から「重い神経炎」をわずらい職務に支障をきたすことになったため、満期前の四月七日付で解雇となりました。そのさい、愛知県は七宝焼の花瓶一對と金一五〇円を贈って、誠意ある処遇をしています。ヨングハンスと同じ三年の任期が満ちた足立盛至は、二〇円でした。

3 福沢諭吉の息子たちの後見人

ヨングハンスは、日本人アメリカ留学生との関係でも名をとどめています。一八七六（明治九）年六月二五日、パシフィック・メイルのアラスカ号で、横浜からアメリカに向かい、ニューヨーク州のポーキプシーというところに住んでいたとき、福沢諭吉の息子たちの後見人

ないし世話係であったのでした。

諭吉は、一八八三（明治一六）年以来、長男一太郎をニューヨークのコーネル大学に、次男捨次郎をボストンのマサチューセッツ工科大学にそれぞれ留学させたとき、これらの教育・生活指導・健康管理を、ポーキプシーに住むD・B・シモンズに託していました。シモンズはかつてオランダ改革派教会から派遣されて一八五九（安政六）年に来日し、一八八二（明治一五）年にアメリカへ帰るまで、医療宣教師として横浜で開業したり、神奈川県立十全会病院に勤めたりした人物です。そのシモンズが、ふたたび来日することになったので、同じポーキプシーに住んでいた友人のヨングハンスを、自分の後任として推薦したものです。

養子の桃介の場合は、一八八七（明治二〇）年に留学したさい、ヨングハンス宅に寄寓してイーストマン・ビジネス・カレッジに通ったのでした。

一太郎、捨次郎、桃介が留学中に諭吉とやりとりした書簡やかたちの回想録のなかに、ヨングハンスのことがしばしば登場しています。ずいぶん口うるさく思われたらしく、ヨングハンスの「羈束は不本意なり」、「随分六ヶ敷事を申す」、「同人の世話は面白からず」などと諭吉に訴えています。そのころ、ヨングハンスは医院を開業し、愛知県お雇い教師時代に日本人女性とのあいだにできた子どもと一緒に住み、その子をきびしく育てていました。「非常に意志の強固な人」で、「立派な武士道を守った人」であった、ということも伝えられています。

三 ローレツ先生——ドイツ医学の普及

1 民族地理学研究のための来日

◆ウィーン大学医学部出身の医学博士

ローレツは、オーストリアの生まれでした。貴族の称号であるフォンを付してフォン・ローレツというから、貴族の出であることがわかります。ローレツ家は、チェコとの国境に近いホルンにブライトナイヒ城を所有していました。

ウィーン大学医学部に学び、内科学位と外科学位を取得しました。ウィーン大学医学部といえば、このころ世界の最高水準にありました。ローレツはここで数多くの科目を修めましたが、なかでも解剖学を大量に履修したことが、医事・衛生行政を履修したことがめだっています。

ウィーンにある癲狂（てんきょう）院の勤務医をへて来日するのですが、お雇い医学教師として招へいされたわけではありません。実は、博物学への強烈な関心から来て東アジアへの調査研究旅行を意図し、その調査旅行を円滑かつ安全に遂行するために、公使館付き医官とい



ローレツが学んだウィーン大学医学部
(名古屋大学博物館教授西川輝昭氏提供)

う官職について、やって来たのでした。叔父が東アジア弁理公使として赴任するとき、随伴してきました。

明治はじめに来日した外国人のなかには、政府の命をうけ、対東アジア貿易振興政策の一環として物産や商工業を調査するという目的をもって来訪し、日本の各地を旅行する者がありました。ローレツの場合はちがつていました。市場調査というよりむしろ、個人的な博物学研究調査という目的からなのでした。

来日は明治七（一八七四）年一月二六日。アメリカを経由し、太平洋航路で横浜へやってきました。

ローレツ来日の一年前、かれの住むウィーンでは万国博覧会が開かれていました。日本

◆ 横浜における医院の開業

来日した翌年の三月、早くも念願の調査旅行をくわだて、西日本へむかいました。内地旅行免状の申請記録には、かれの官仕身分は医師、旅行趣意は「学術研究」、旅行先および路筋は「大阪京都九州四国大和伊勢尾張美濃信濃甲斐」、そして保証は「公使ノ保証」とあります。

この西日本探検旅行より戻ってから、横浜滞在中に医院を開業しました。

「今ハ漸く盛に洋医を信仰する事に成り志かハ西洋よりも益々上手の医師が出て来ます當時横浜九十二番に滞留する澳地利国の医師ドクトル、ホン、ローレツ氏ハ彼国に於て既に諸人の尊信する上手なりしが日本へ来りても手際の程を知りて矢張人々にもてはやさるゝより此度新たに規則を立て日々午前九時より十時迄午後二時より三時迄診察を許し中外患

僕今般當港ニ於テ廣ク醫術ヲ施サント欲ス
 病患ノ者ハ乞フ速ニ來テ診察ヲ受ンコトヲ
 診察自午前九時十時迄午後自二時三時迄
 横濱九拾二番澳地利國匈牙利國公使館附屬
 醫官 ドクトル、フオン、ローレツ

ローレツの医院開業広告
 (『東京日日新聞』1875年12月16日)

政府がはじめて正式参加し、日本の物産や美術工芸品(名古屋城の金鯨など)の展示がヨーロッパのジャポニズムを刺激したという博覧会でしたが、ローレツも日本探訪心をおおいに刺激されたであろうと考えられます。

者を問はず専ら治療を施すと云ふ」

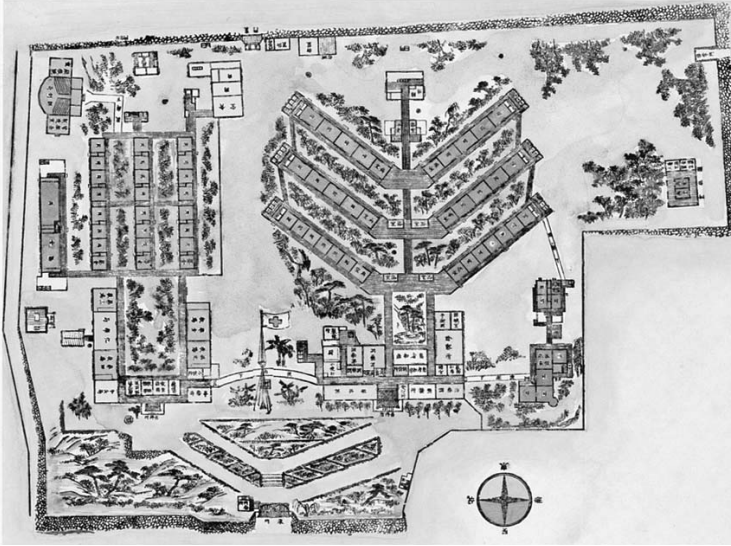
『郵便報知新聞』（明治八年二月五日）には、このように報じられていますが、一か月あまり後の一二月一六日になると、今度は、ローレッツみずから、『東京日日新聞』に別掲のような広告を掲載しています。オーストリア・ハンガリー公使館附属医官でありながら、医院を開業するというのです。附属医官といっても、無給の名誉官職であったからだと思われます。

2 愛知県公立医学校のお雇い医学教師

◆雇用契約

やがて愛知県からお雇い教師の口がかかり、一八七六（明治九）年五月、公立病院および公立医学講習場へ着任しました。三〇歳のときでした。

雇用契約によれば、ローレッツの任期は一八七六（明治九）年五月一日から一八七九（明治一二）年四月末日までの三年間でした。月給は三〇〇円。横浜と愛知県のあいだの往路・復路の旅費として、それぞれ五〇円が支給される。これに住宅一軒の宿料として一か月六円五〇銭を加える、という条件です。当時、愛知県令安場保和の俸給は月額二五〇円であったのですから、ローレッツの場合も、厚遇ぶりがうかがわれます。三年の任期が満ちるとき、さらに一年間、



愛知県公立病院・公立医学校の平面図
 (『愛知県立医学専門学校校友会雑誌』34号、所収)

契約が延長されました。四年目は月額四〇〇円に増額されています。

◆堀川端の医学校

ローレツが赴任したころ、ちょうど、名古屋・天王崎町の丘陵地に病院・医学校の建築が着工されたところでした。堀川東岸の、洲崎神社がある北側あたりです。西本願寺別院にあつた医学講習場は仮住まいであり、手ぜまになつたからです。「この病院・医学校のマスタープランは・・・ヨングハンスが自己の見聞に基づき、様々助言したこともあつた」と推測されています。一八七七(明治一〇)年七月一日には、盛大な落成式がおこなわれました。

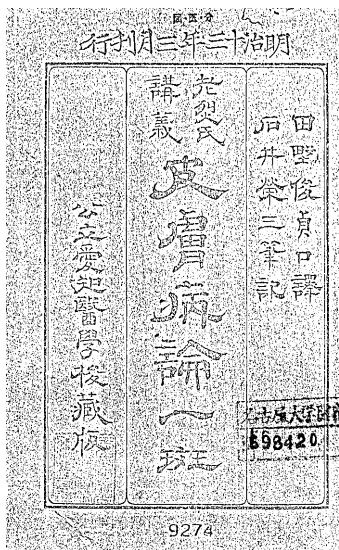
敷地はおよそ五七〇〇坪ありました。堀川河畔の街路に面した表門をはいり、植えこみにかこまれた爪先あがりの道を右に登ると病院（公立病院）が、左にとると医学校（公立医学所、のちに公立医学校と改称）がありました。石の門柱には、それぞれ愛知県病院、愛知県医学校という札がかけられていました。

新装なった病院と医学校は、出入り口や窓枠にアーチがふんだんに取りいれられていました。木造構造にしつこい塗り、ガラス窓、二階建ての擬洋風建築で、堀川河畔の高台に偉観をほこっていました。世間では「河の病院」と呼ばれ親しまれました。

この病院と医学校で、ローレツは、求めに応じて学識と腕前をいかんなく発揮しました。一八七八（明治一一）年二月には、下顎の骨の癌におかされた青年に大手術をほどこしました。翌年の春には、尿道結石に苦しむ幼児の命を救っています。その都度、地元紙は施術の景況を報じています。

◆『皮膚病論一班』

治療のかたわら、外科通論、婦人病論、皮膚病論、梅毒病論、産科学、断訟医学（法医学）、内科臨床講義、外科臨床講義を担当し、世界有数といわれたウィーン医学の普及につとめました。



『老烈氏講義 皮膚病論一班』
(名大附属図書館医学部分館蔵)

このうち、皮膚病論の講義は邦訳され、『老烈氏講義 皮膚病論一班』(明治一三年三月)として刊行されています。F・ヘブラが創始した最新の皮膚科学の一端を、わが国にはじめて紹介した書物として知られています。

当時、先進的な文物を導入し教授しようとするさい、専門用語にどのような訳語をあてるかが大きな問題でした。本書でも、たとえば、丹毒たんどくに「羅斯」という訳語をあて、これに原名(Erysipelas)とそのカタカナ読みであるエリシペラスを併記するなど、西洋医学移入期の苦心がしのべれます。

◆ 「愛知県病院手術図」

「愛知県病院手術図」といって、五名の日本人医師や医学生に、ローレツが外科手術の実地指導をしている絵が残っています。絹地に浮世絵手法で着色されています。為、学士老烈先生嘱、方洲弘図」とありますように、愛知県出身の浮世絵画家・柴田方洲(名は弘)が、ロー

レッツに委囁されて筆をとったといわれています（本書の表紙参照）。

極彩色のタイル張りの室内。ガラス窓近くにある一基のベッド。そのベッド上の患者の右上肢に、ざんぎり頭の青年が片ひざ立ちになってメスをあて、今まさに切断しようとしています。この青年こそ後藤新平（一八五七―一九二九）と思われまふ。そのかたわらで患者の腕を支えているのが、司馬凌海と伝えられています。調度からも色調からも、明治の香気が強く漂ってくるようです。

ローレッツはというと、麻酔係で手術の介添え役。スキネルのマスクをつけ、クロロホルム麻酔をほどこしています。袴を着用し、たすき姿の禿頭の老人として描かれています。老烈という名にちなんで禿頭に描かせた、というのだからおもしろい。それに、ローレッツは禿頭で和服姿であるのに、日本人の方はざんぎり頭、洋服姿で描かれていますから、その対照がきわめて象徴的であります。

この絵は日本医事文化史料として貴重であり、日本医史学会編『図録日本医事文化史料集 成』第二巻（一九七七）に収められてもいます。

◆司馬凌海と後藤新平

「愛知県病院手術図」に描かれた司馬凌海は、一八七六（明治九）年五月、ローレッツと一緒に



ローレツと後藤新平（『写真集 名古屋大学の歴史1871～1991』所収）

に愛知県に招かれました。職名は「副教師
通弁兼医校教師」とあり、ローレツの通訳
もつとめました。

ローレツと司馬凌海が招へいされたところ、
愛知県病院は愛知県公立病院に、医学講習
場は公立医学所にその名を改めました。病
院、医学校としての面目を一新し、体裁を
ととのえ、その基礎はいよいよ確立される
に至りました。

ローレツの着任を機に、授業で使用する
原書が英語の本からドイツ語の本に変更さ
れ、教授内容は英学からドイツ学に転換さ
れることになりました。ローレツはドイツ
語でドイツ医学を教えたのですから、生徒
は訳官の通訳を介して学んだのでした。公
立医学所の規則等もあたらしく整備され、

試験により生徒の等級を定めたり、各学科の免状をはじめ授与することになりました。

以来、隆盛にむかいその名がぜん高くなったところ、福島県からやってきたのが後藤新平です。後年、板垣退助が岐阜で遭難したとき、かけつけて治療したその人です。

大志があり、烈々と燃える功名心があつたこの後藤を、ローレツは自分の後継者と考え、その薫陶に全力をあげたものです。

自分はいくまでお雇い外国人である。契約した年限をつとめ、約束の報酬をえて帰国すればそれでよいが、自分としては、良医を養成して将来の公益をはかりたい一念である、という思いで育てたのでした。

後藤が病をえて、赤松が一带につづく八事山に静養することになったとき、ローレツは病気の治療から食事の世話まで、親身の温情をかたむけたといえます。そのような二人の水魚のよな交わりは、後藤の女婿である鶴見祐輔の著書『後藤新平』（一九六五）に、描かれています。

◆ 学術雑誌『医事新報』の出版

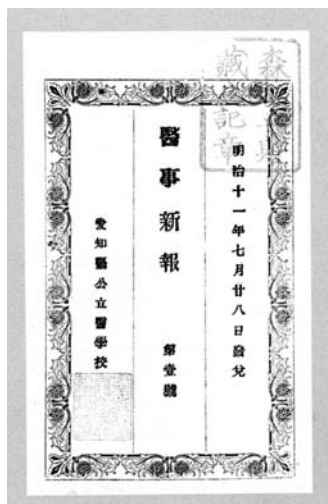
ローレツの講義や指導内容は、出版物をとおして広められたことが注目されます。『老烈氏講義

皮膚病論一斑』という図書が出版されたことは前に述べましたが、図書だけでなく、『医事新

抄訳も掲載されています。

『医事新報』のはじめのころの紙面をみると、断訟医学の講義内容がひんばんに収録されています。警察上の医事に関する診断や解剖にかかわる講義です。

ローレツは学内や病院内での医学教育や診療活動だけでなく、校外にでて警察上の医事に関する診断、解剖にも関与していましたので、そのときの自験例をまじえながら講述したのが、この断訟医学の講義でした。これらの講義も、やはり開業医や警察官にも開放されていました。



『医事新報』創刊号
 (『写真集 名古屋大学の歴史1871～1991』所収)

報』という学術雑誌も刊行されました。ローレツの指導のもとに編集され、一八七八(明治一一)年七月二八日に創刊されました。当初は毎月一回、一八八〇(明治一三)年三月からは毎月二回の割合で発行されています。一部五銭で販売もされました。これこそ本学最初の定期刊行物と考えられます。ローレツの講義記録や臨床治療の報告のほか、海外の新薬の紹介や医学雑誌の

廣 告
 義二愛知縣公立第一師範學校ノ學費シ客歲(即本月紙第一
 号)ノ辭免シ額本月來一号ヲ列シ行シ來リ候處本年三月
 第九号ニ至リ額工價カニ大異ニ印刷行ノ額カ三俵
 九号ニ至リ額工價カニ大異ニ印刷行ノ額カ三俵
 九号ノ發定仕價此處登載者客歲登載ニ報告ト併セテ急便ノ
 罪ニ謝ス
 愛知日報社敬白
 十月廿八日發兌

醫事新報 第九号 定價五錢

○但毎月二沙宛列行
 諸君ハ本縣公立醫學校ニ於テ改題英熟先生ノ講義
 及病床治驗ハ海ノ金醫ヲ説キ抄録精シ以テ
 名病ノ治驗ハ須知ノ金醫ヲ説キ抄録精シ以テ
 ナリ其講義ハ海ノ金醫ヲ説キ抄録精シ以テ
 ヲリ其講義ハ海ノ金醫ヲ説キ抄録精シ以テ
 ヲリ其講義ハ海ノ金醫ヲ説キ抄録精シ以テ



諸君ハ本縣公立醫學校ニ於テ改題英熟先生ノ講義
 及病床治驗ハ海ノ金醫ヲ説キ抄録精シ以テ
 ナリ其講義ハ海ノ金醫ヲ説キ抄録精シ以テ
 ヲリ其講義ハ海ノ金醫ヲ説キ抄録精シ以テ
 ヲリ其講義ハ海ノ金醫ヲ説キ抄録精シ以テ

明治十一年九月廿八日發兌
 ○醫事新報第二號
 定月一号宛發兌
 定價 五錢
 諸君ハ本縣公立醫學校ニ於テ改題英熟先生ノ講義
 及病床治驗ハ海ノ金醫ヲ説キ抄録精シ以テ
 ナリ其講義ハ海ノ金醫ヲ説キ抄録精シ以テ
 ヲリ其講義ハ海ノ金醫ヲ説キ抄録精シ以テ
 ヲリ其講義ハ海ノ金醫ヲ説キ抄録精シ以テ

『医事新報』の広告

◆出版をとおした知の拡張

『医事新報』の刊行にあたり、広報宣伝活動
 が盛んにおこなわれたことも特筆されます。あ
 たらしい号が出るたびごとに、「医科須験ノ金
 科玉条ヲ報告スル」ものであるから購入するよ
 うにとの広告が、その都度、地元の新聞紙上に
 掲載されたのです。『愛知新聞』にはひんぱん
 にあらわれ、ときには絵入りの広告が登場して
 います。
 明治のはじめ、開学してまもないころ、すで
 に本学は、このような図書や雑誌を刊行し、し
 かもこれを繰り返かえし紹介・宣伝していたので
 した。学校における知の成果を広く社会へ還元
 しようという姿勢をあらわすものとして、注目
 されます。

稟告 あらせ

僕に素古器物ヲ嗜ム幸イニ貴地ニ聘ヒラル、ヲ以テ遍ク之ヲ購求セント願クハ諸彦割愛ノ情ヲ辱フセバ品種多少ヲ問ハス弊寓ニ携ヘ來ランコトヲ是請フ

第一區七前津町地當三百十八番
愛知縣病院教師
塊地利國概略
ドクトルルフォンローレツ

漆器類
銅器類
陶器類
武器類
玉器類
土偶人類
珍禽奇獸虫魚貝類
石類
化石類

追々余カ名義ヲ以テ物品ヲ取取スル者有テ時日ヲ經ル后代價ヲ請求スル人有甚ク以テ不都合ニ付向來余カ押印シ注文スル歟又ハ自ノ注文セルモノ、外ハ必ス取合冊之様致慶且又代價ハ該日内ニ要求相成慶仍ア此段普告ス

愛知病院教師
ドクトル、ローレツ

古美術・博物収集のための稟告
 (『愛知新聞』1876年10月2日、1879年11月12日ほか)

◆ 博物学の調査研究

もともと、博物学の調査研究を意図して来日したローレツのことです。お雇い教師として定められた本務の余暇に、念願の資料収集や調査研究につとめたことはいまでもありません。

地元紙の『愛知新聞』や『愛岐新聞』に何度も広告を出して、古美術品や化石類、珍禽（ちんきん）奇獣虫魚貝類などの収集につとめました。そうした収集ぶりは悪用され、ローレツの名をかたつて物品を買いつける者まであらわれたほどでした。弱りきつて、今後は自分が押印し注文したものを以外は支払いをしない、という新聞広告まで出しています。

そのころ、愛知県といえば、骨董品の

名だたる土地として、外国人に知られていました。なかでも「大きな藍色の模様をついた尾張の陶磁器」と、「優雅な七宝のほうろう鉄器」の製造地として有名で、ここに来るとかれらの収集癖は「抑えがたい欲望」になったようです。G・ブスケ『日本見聞記』やE・W・クラーク『日本滞在記』にも、そのことが記されています。ローレッツの収集品のなかにも、これらの古美術品が含まれていたにちがいません。

当時、外国人でも、外務省が発行する通行免状があれば、日本の事物に関する学術的な調査研究のために、内地旅行することが許されてきました。ローレッツがこれを活用しないはずはありません。

来日早々から、先に述べたように、かれは内地旅行免状を手に入れ、大阪、京都、九州、四国、大和、伊勢、尾張、美濃、信濃、甲斐に、資料を求め歩いたのです。そのさい、京都では生糸と陶磁器の調査に没頭し、大阪では貨幣の収集につとめ、貝や蟹のほか昆虫などを入手しています。その後、神戸から長崎にむかい、有田では陶磁器を調査したし、熊本近くの大島ではめずらしい三味線貝を採取しました。長崎では貝象眼を手にして楽しんでます。その成果は、「日本南部旅行報告」（一八七五―七六）という紀行文にまとめられています。

愛知県雇いになってからも、休暇を利用しては各地を採訪しました。一八七七（明治一〇）年七月には一か月の予定で北海道へ旅立ったし、一八七九（明治一二）年の暑中休暇にも、一

か月間、函館まで出むいています。博物学調査と資料収集もかねた旅行であったと思われる。一八八〇（明治一三）年七月にも、暑中休暇中の学術研究を目的とした旅行免状を申請しています。

調査旅行の成果は報告論文となつてあらわれました。先の「日本南部旅行報告」という紀行文のほか、つぎの三篇が知られています。短い報告ですが、母国オーストリアの新聞や雑誌に寄稿しています。

「日本における樟腦の製造」（一八七五）

「日本の漆器」（一八七六）

「日本における鳥の飼育上の諸問題」（刊年不詳）

ローレツは動物標本の採集者としても、知られています。マボヤ (*Halocynthia roretzi*) やカネコトタテグモ (*Anthrodiatus roretzi*) の学名には、ローレツという名前が含まれているのです。

◆日本趣味

ローレツは六尺豊かな巨漢であり、口とあごに濃いひげをたくわえていました。額がすこし禿げあがっていたことからか、「老烈」という日本字を愛用しました。「魯列」とか「魯劣」

とかを、好んで墨書することもありました。

すこぶる日本趣味の人でして、茶の湯、生け花をたしなんだほか、香道を蜂谷宗意に学びました。名古屋市西区の宗像神社近くにある蜂谷家では、いまでも伝統が守り伝えられており、この静かな香室でローレツは香をきいたのでした。

刀剣にも興味をもち、旧尾張藩士の尾崎忠景に師事して、その鑑定法を学ぶことがありました。このほか、古美術品を収集するなど、とにかくローレツは日本の生活と文化にとっても強い関心をいっていました。新守座の狂言「道成寺」を見にでかけたという記録もあります。中村芝翫による白拍子の舞に感心し、祝儀にそえて一筆したためています。

◆愛知物産博覧会への出品

博物学に関心をもち、古美術品の収集を趣味としたローレツです。そのころ開かれた博覧会には、足しげく通ったはずですが、明治期、政府が殖産興業政策の一つとして勸業博覧会をひんばんに開くと、それに応じて、府県や民間主催の博覧会が各地で開かれたのですが、名古屋でも、一八七四（明治七）年につづいて、一八七八（明治一一）年の九月一五日から五〇日間、下茶屋町の東本願寺名古屋別院で開かれました。

この愛知物産博覧会で展示された物品はすこぶる多く、三万余といわれました。ローレツは



ローレツの肖像
 (『写真集 名古屋大学の歴史
 1871～1991』所収)

これらを参観したのみならず、自分も、アルコールに浸した八か月と四か月の胎児などを出品したという事です。

日本滞在中に収集した古美術品などの物品は、故国の博物館などに送られました。ローレツ自身の手で持ち帰ったものもあります。それらのうち何点かは、ローレツの死後、オーストリア政府によつて買いあげられ、現在、ウィーンの国立民族学博物館に、古墳時代の耳飾りなどが残されています。

3 医療行政に関する建議・提言

◆汚水排導法の建議

ローレツは県や学校当局に、種々の献策をなしています。なかでも汚水排導法の建議、健康警察医官設置の提言、癩狂(てんきょう)院設立の建議、の三件が注目されます。

最初の汚水排導というのは下水道のことですが、これの施設を建議したのはコレラの流行にかんがみでのことでした。コレラは一八七七(明治一〇)年八月、清国から長崎にはいり、た

ちまち関東地方まで流行しました。猛威をふるって、全国で八〇〇〇余名の死者がでました。愛知県でも、コレラ騒動はそれはそれはいへんなものでした。村社・郷社での安全祈禱、コレラ病用心薬の宣伝、コレラ退散を願ったドンチャン騒ぎなどがみられました。当時といえ、コレラの猛威に対して、隔離するか石炭酸で消毒する以外に手だてがありませんでした。内務省衛生局でさえ、黄色の布に黒く「コレラ」と書いた旗を隔離病院にたて、その境界に制止棒を立てるといふ程度であったのです。

このようなコレラ騒動のなか、防疫について指導を求められたのでしよう。ローレッツは『虎列刺病予防法報告』や『虎列刺病新誌』を著わし、これを管内に頒布したのでした。飲料水と生活排水を区別すること、便所に近い井戸水はよくないことを説く一方、環境衛生の浄化の立場から、県に「汚水排導法」を建議したのでした。これは容れられて、汚水排導溝のモデル設備が病院・医学校内につくられることになりました。

名古屋は古くから下水道がよく普及していますが、その遠因はローレッツにさかのぼると称えられています。

◆健康警察医官養成の提言

コレラ騒動が契機となったのでしよう。ローレッツは、立ちおいていた県下の公衆衛生行政



ローレツの設計した精神病室
 (名古屋大学医学部精神医学教室『教室五拾年史』1958、所収)

の実態に注目し、健康警察医官を設けて、民衆に対する日常的な指導と取り締まりをすることの必要性を説くこととなります。「健康警察医官ヲ設ク可キノ建言」がそれです。これはローレツの所説を後藤新平が翻訳し編集したもので、後藤により県に提出されました。

後藤は、これをさらに発展させて「愛知県ニ於テ衛生警察ヲ設ケントスル概略」を、内務省衛生局長の長写真斎にあて提出したのでした。衛生行政の高い見識は、後藤を介して政府の政策に反映することになります。

◆癲狂院（精神病院）設立の建議

最後は「癲狂院設立の建議」です。当時、癲狂つまり精神病者はキツネつきとか悪霊つきとかいわれ、その待遇は陰惨をきわめていました。家庭でも社会でもまったく人権が認められていなかったことに心を痛めたローレツは、それが病気であることを説き、一般患者なみに保

護・収容し、これに治療を加えて社会復帰させるべきである、と考えたのでした。

この建議も容れられて、院内の南東、洲崎神社のわきに、ローレツの創意工夫になる癲狂室が設けられました。一八八〇（明治一三）年四月、任期満ちて離任する直前のことです。

「此造営ハ本院教師『ローレツ』独、英、仏等諸国ノ築造ヲ斟酌シ我国ニ適セシメ創立スル所ノモノニシテ我国諸府県ニ於テ未タ曾テ有ラサル所ノ者ナリ」

と、『愛知県公立病院及医学校第一報告』に記されています。わが国初のヨーロッパ式癲狂室というのです。

その癲狂室は小規模ながら、かなり広い畳の床、鉄格子窓、換気および光線遮蔽透射装置、室内監視用のガラス窓のついた戸など、患者擁護のための配慮が払われていました。欧州諸国の枠を集めて考案した、斬新で周到な構造でした。

◆公立医学校の学則の制定

ローレツの指導性は、医学校の学則の改正整備やカリキュラムの編制において顕著でした。病院・医学校の新築移転につづいて、一八七八（明治一一）年二月には新規則の制定がすすめられました。『名古屋大学五十年史 通史一』に具体的に記述されていますように、「学期、教授科目、学級編成、試験方法等医学教育の根幹部分についてはローレツが主となり、オース

トリアにおける被医学教育体験などに基づいて構想し」たものでした。

そのうち、カリキュラムについては、他校とはちがった大きな特色がみられます。学科目数と総単位数の多さ、病理解剖学の重視、臨床医学における皮膚科学系の重視、衛生警察学や断訟医学という社会医学の開講、の四点です。これらは「ローレツが医学を学んだウィーン大学医学部の特色」であつたのです。田中英夫『御雇外国人ローレツと医学教育』では、これを「愛知県公立医学校における新ウィーン学派医学の受容」と名づけています。

◆惜別の辞

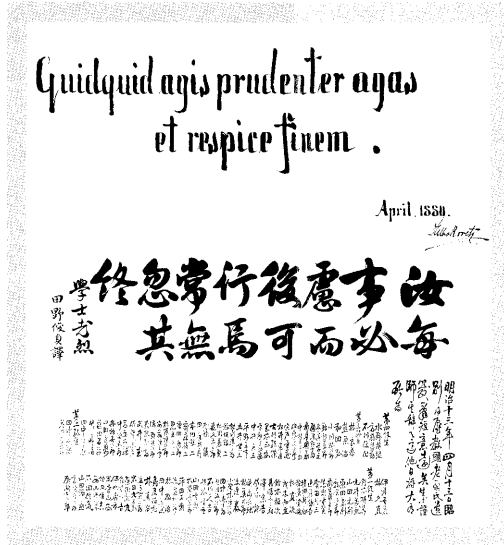
任期満ちて離任するにあたり、ローレツが残したラテン語の箴言しんげんがあります。

「*Quidquid agis prudenter agas et respice finem*」

といて、『ローマ人行状記』第一〇三話のなかにある箴言ということです。「なんじ常に謹んで事をなせ。その終わりをゆるがせにするなかれ」という意味であつて、これに

「汝毎事必慮而後可行焉常無忽其終」

という漢訳と、その下に在校生九三名の名前が墨書された大幅の掛軸が、名古屋大学附属図書館医学部分館に残されています。のちに赴任した山形では、「急がば廻れ (Eile mit Weile)」という箴言を残していますが、短兵急に西洋医学の成果だけを吸収しようとした日本の姿勢に、



ローレツの惜別の辞
 (名古屋大学附属図書館医学部分館蔵)

警鐘を鳴らしたことばとして、まことに意義深いものがあります。

一八八〇(明治一三)年四月一三日という日付が入っていますから、名古屋・熱田の水月楼で開かれた送別の宴のときに、院長代理の後藤新平による送辞に
 応えて、関係者に諭告したものと伝えられています。

ローレツは、四年間、学識と情熱をもって医学教育と社会医療に従事し、西洋医学の真味を愛知県下に広めました。県はその功績に対し、金六〇〇円を贈って慰勞しました。

4 地方におけるドイツ医学の導入

◆金沢と山形のお雇い教師

ローレツの活動は愛知県にとどまりませんでした。金沢、山形からも招かれています。

まず、金沢医学校（いまの金沢大学医学部）の教壇にたち、一八八〇（明治一三）年四月末から八月までの短期間でしたが、衛生学・産科学・生理学・眼科学・裁判医学を講義しています。当地には、かつてオランダ人教師のP・J・A・スロイスとA・ホルトマンが雇われていましたが、ローレツの招へいを機に、金沢の医学教育はオランダ医学からドイツ医学に方向転換しはじめることになります。

つづいて、今度は、山形の済生館医学寮に招かれました。同年八月二〇日、海路を、金沢から酒田港をへて最上川をのぼり、山形に赴任したのでした。

山形県でも、西洋医学の新風を吹きこもうと、烈々たる気迫をもってやって来たにちがいありません。梅毒検査規則の制定や済生館改進黨などを県に建議しました。けれども、ここでは容れられることはありませんでした。貧弱な財政であるうえに、県令の三島通庸による土木事業に大きな負担を強いられているころであつたからです。一八八二（明治一五）年になると、招へいし支援してくれた三島県令が転出するし、県議会ではローレツ排斥決議まで可決された

のですから、居心地はよくなかったはずですよ。

趣味の狩猟だけは存分に堪能したようでした。また、野山が銀世界になると、故郷オーストリアにおもいをはせ、さつそくソリを作つてまちを滑るのを楽しむことはありました。けれども、きつと満たされぬ日々が多かつたにちがいありません。とうとう同年の七月二六日には山形をあとにしました。任期は、二か月あまりも残つていました。

◆ 勲五等双光旭日章

どうか日本のために、日本の医学界のために、立派な医者養成し、公益を将来に期したい。これがローレツの本懐でした。このような願いをいだいて、横浜、名古屋、金沢、山形と移り、地方医学の興隆に力を尽してきました。地方におけるドイツ医学導入の基礎づくりをしたという功勞に対し、勲五等に叙され双光旭日章が贈られています。

この叙勲のさい、愛知県はかれの履歴書と功勞調書を作成し、

「前後ノ両約期併セテ四ケ年間、能ク診治及教育ニ勉力シ……医学政事ノ改新ヲ図リ屢々

衛生警察上ノ建言ヲ呈シ、且ツ警察裁判医ニ係ル実事ヲ弁理シ、年々數回健病ノ実地解剖

ニ従事スル毎ニ医員教員生徒及開業医師ニ示シ丁寧ニ教化シ……」

と称えております。



ホルン市シュテファーン教会にあるローレツ家の墓碑
(名古屋大学博物館教授西川輝昭氏提供)

◆ボヘミアの皇女との結婚

ローレツは、お雇い医学教師の任務を終えると、一八八二（明治一五）年八月一日に日本を離れました。

帰国してから、ボヘミアの皇女O・フォン・チェムシシエニコフと結婚し、ウィーンにあるサナトリウムの病院長になりますが、一八八四（明治一七）年の七月二〇日、心臓マヒのため急逝しました。享年三七歳。ホルン市フリートホーフ墓地にある、一族の墓に葬られています。

その墓碑には、ローレツの横顔のレリーフとともに、つぎのような碑文があります。

「アルブレヒト・フォン・ローレツ、

病院の院長にして、日本の医学学校の

内科・外科教授

一八四六一一八八四」

山形市の霞城公園にある郷土館（旧済生館本館）の前庭にも、かれのブロンズレリーフがあります。これは、右の墓碑からとった拓本をもとに作成されたものです。

◆文化交流・研究交流の進展

山形市郷土館には、右のローレッツ顕彰碑のほかに、ローレッツの遺品が数々展示されています。外科用器具、カバン、学生時代のテキスト、自筆の解剖図、鉗子使用法図、日本から持ち帰った写真など、生地ホルンのローレッツ家から寄贈された品々です。没後一〇〇年を記念して、日本・オーストリア共同によるローレッツ研究をはじめ、さまざまな企画もなされました。

ローレッツが日本滞在中に採集した動物標本は、順次ウイーンの王室博物館に収められました。現在はウイーン自然史博物館に引きつがれています。コレクションは「三五〇種以上を含む一四五〇点あまりの標本」から成り、海綿動物から哺乳類にまでおよんでいます。そのなかには、ローレッツの名前のついたマボヤの新種や、釣り餌として有名なユムシの標本群も含まれています。これらローレッツ・コレクションは、名古屋大学博物館の西川輝昭教授が中心となり、現地の研究者と共同で本格的な学術調査が始められ、その全容がようやく明るみになるうとしています。

おわりに

名古屋大学には、早くから、数々の外国人教師がやって来ました。語学ばかりでなく、医学や商業学、体育の教師もいました。外国の進んだ学術や技芸、制度を教授するという期待にこたえてくれた人たちです。そのうち、ヨングハンスとローレッツの二人は、本学の歴史が始まってまもないころ、文明開化の時代に対応して、あたらしい医学人材を養成するために活躍しました。そのさい、かれらをとおして、かれらの母国との交流と関係が進展していることが注目されます。かれらは、本学の国際交流を拓いた人たちなのでした。

国際交流といえば、ちょうどいま、本学では、海外の多くの大学とのあいだで学術交流の推進を図ることが企画されています。国際フォーラムを定期的に開催することのほかに、教職員や学生の交流の活性化、「研究成果や学術情報の共有化の促進、教育プログラムや学術授与プログラムの開発に関する連携の促進」が構想されています。グローバルイニシアティブが進展するなか、教育・研究活動を一段と活性化し、国際社会・地域社会へ積極的に貢献しようというものです。

国際社会・地域社会への貢献を志向するというのですが、そうした貢献をとおして逆に、本の教育・研究のあり方の見直しと充実にも生かしたいものです。

明治時代、外国人教師が日本側の求めに応じて各種の活動をなすさい、かれらの念頭には母国の教育モデルがありました。とうぜん、東西文化の葛藤が繰りかえされるなかでの活動でしたが、かれらは、わが国でのそうした活動体験と教育実験の成果をもち帰り、母国での教育改革に参画してその成果を生かしたのです。国際的な貢献と連携は、わが身の反省と成果の糧ともなるものなのです。

主要参考文献

- 石井榮三編『愛知県公立病院及医学校第一報告 自明治六年至同十三年』（編輯局、一八八〇）
- 富士川 游「石黒先生昔年医談（承前）」『中外医事新報』三三五号（一八九四年三月五日）
- 福沢桃介『桃介は斯くの如し』（星文館、一九一三）
- 『愛知県立医学専門学校校友会雑誌』第三四号・新築開校記念号（愛知医学専門学校々友会、一九一四）
- 中野禮四郎編著『鍋島直正公伝』第六編（候爵鍋島家編纂所、一九二〇）
- 慶応義塾編『福沢諭吉全集』一七卷・一八卷（岩波書店、一九六一）
- 青井東平編『名古屋大学医学部九十年史』（名古屋大学医学部学友会、一九六一）
- E・W・クラーク（飯田宏訳）『日本滞在記』（講談社、一九六七）
- 飯尾一路『瑞穂丘物語』（八高創立60年記念事業実行委員会、一九六八）
- 『名古屋大学文学部二十年の歩み』（名古屋大学文学部、一九六八）
- 梅溪 昇『お雇い外国人①概説』（鹿島研究所出版会、一九六八）
- 中野 操『ヨングハンス覚書』『医譚』復刊四二号（一九七〇年十二月）
- 田中英夫「ある藩医の明治維新——中島三伯試論」『東海地区大学図書館協議会誌』二二二号（一九七六）
- G・ブスケ（野田良之・久野圭一郎訳）『ブスケ 日本見聞記』一（みすず書房、一九七七）
- 田中英夫「中島三伯試論——^{クワガレ}晩昏再考」『東海地区大学図書館協議会誌』二七号（一九八二）
- 加藤詔士「ドクトル・ヨングハンス——福沢諭吉の息子たちの洋行時代の後見人」『三田評論』八六四号（一

九八五年一月)

三好信浩 『日本教育の開国、外国教師と近代日本』 (福村出版、一九八六)

名古屋大学史編集委員会編 『名古屋大学五十年史』 (名古屋大学、一九八九～一九九五)

名古屋大学史編集委員会編 『写真集 名古屋大学の歴史 1871～1991』 (名古屋大学、一九九一)

田中英夫 『御雇外国人ローレツと医学教育』 (名古屋大学出版会、一九九五)

『尾張から見た日本と世界の医学史 第二四回日本医学会総会「医学史展示」図録』 (第二四回日本医学会総会記念事業会、一九九八)

西川輝昭 「ローレツとマボヤ——ウイーン自然史博物館での標本調査によせて」 名古屋大学博物館『NUM Newsletter』 No. 七 (二〇〇一年八月)

T. Nishikawa & H. Sattmann, 'List of Dr. Albrecht von Roretz's collection of Japanese animals made about 120 years ago, compiled from the catalogues of Naturhistorisches Museum Wien', 『名古屋大学博物館報告』一七号 (二〇〇一)

著者略歴

加藤 鉦治（詔士、かとう しょうじ）

一九四七年 愛知県生まれ

名古屋大学大学院教育学研究科修了

現在 名古屋大学教育学部・大学院教育

発達科学研究科 教授

専攻 教育史

名大史ブックレット⁵

名古屋大学最初の外国人教師

—— ヨングハンス先生とローレッツ先生 ——

二〇〇二年三月二十九日 第一刷発行

著者 加藤 鉦治

編集発行

名古屋大学大学史資料室

〒464-8601 名古屋市千種区不老町

電話 〇五二（七八九）二〇四六

印刷所 株式会社 ク イ ッ ク ス

〒456-0004 名古屋市熱田区桜田町一九一〇〇

電話 〇五二（八七二）九一九〇



表紙表：愛知県病院手術図
(名大附属図書館医学部分館蔵)

表紙裏：愛知県公立医学校
(「写真集 名古屋大学の歴史1871～1991」所収)